

第7回世界水フォーラム デイリー速報 Vol.3



1、 皇太子殿下ビデオメッセージ 「より良い未来へ科学技術の役割は大きい」

14日に開かれた特別セッション「水と災害に関するハイレベルパネル」で、日本の皇太子殿下から英語のビデオメッセージが寄せられました。

皇太子殿下は国連の「水と衛生に関する諮問委員会」の名誉総裁をお務めになっており、第3回京都、第4回メキシコシティ、第5回イスタンブールと過去3度の世界水フォーラムでご講演され、前回のマルセイユではビデオメッセージを寄せられています。

メッセージでは、“人と水の関わり”の中で科学技術が果たしてきた役割について「災害経験を基に検証された記録は、次の災害に備えるための最善の教訓であり、これらを語り継いでいくことこそが科学技術の発展につながっていく」と述べられました。そして自然の力に対しては未だに及ばないところがあるものの、「人々の知恵と工夫、何よりも強い意志と想いが、やがては水に関するよりよい科学技術を生み、より安全で豊かな私たちの未来へ発展していくことを確信している」と呼びかけ、「私たちの未来のための水がより良いものであるよう、私も努力を続けていきたい」と締めくくられました。

Vol.3

1. 皇太子殿下ビデオメッセージ
2. 災害に関する最新知見を発表
3. 先導する閉鎖性水域のIWRM
4. 地方自治体会合 湖沼の気候変動適応策を 滋賀県・西嶋副知事が行動訴え
5. 健全な水循環島へ 産官学民の挑戦を発信 日本パビリオンで九州デー
6. 途上国の汚水処理導入で議論
7. 水資源管理のカギは情報共有 NARBO セッションに関心集まる特集、今日の“人”

2. 水と災害に関する最新知見を発表



ハン・スンス氏（右）、トーマス・ポステック米国陸軍工兵隊司令官（左）

水と災害に関するハイレベルパネルは、国連事務総長特使のハン・スンス元韓国首相が議長を務める、「[水と災害ハイレベルパネル\(HELP\)](#)」が主催しました。

専門家や閣僚レベルの政策担当者によってとりまとめられた「水と災害に関する水政策ジャーナル特別版」を発表した上で、これに基づいた世界的な課題を議論。長期的視点を持った投資戦略の重要性とともに、ハザードマップやゾーニングの形成など開発途上国に対するソフト面での支援の必要性が確認されました。

3. 先導する閉鎖性水域の IWRM(統合水資源管理)



閉鎖性水域における統合水資源管理のあり方について、滋賀大学リスク研究センター(久保英也センター長)の主催によるテーマセッションが行われました。韓国洛東江の水質管理と水利用負担金制度、日本の琵琶湖における行政と住民参加の「ハートウェア」戦略、急激な環境悪化時に金融市場から資金を調達する「環境リスクファイナンス」についてなど、欧州やアジアの研究者に加え、井戸敏三・兵庫県知事、西嶋栄治・滋賀県副知事、嘉田由紀子・元滋賀県知事、李・慶尚北道副知事ら地方行政の首脳クラスが最新知見を発表しました。

4. 地方自治体会合 湖沼の気候変動適応策を 滋賀県・西嶋副知事が行動訴え



地方自治体会合に滋賀県の西嶋栄治副知事が出席し、気候変動の影響により世界中で危機に瀕する湖沼水の保全の重要性を訴えました。下排水と生態系マネジメントのセッションに、スロバキア、韓国の行政担当官らとともに登壇。地表の利用可能な水の9割が湖沼に存在することを前提に、琵琶湖の取組みを踏まえながら、地方政府や国際機関による湖沼保全に関する行動の必要性を主張しました。

また、気候変動と都市化に関するセッションでは、国際湖沼環境委員会の副委員長を務める滋賀大学環境総合研究センターの中村正久特任教授が登壇し、統合湖沼管理“ILBM”の概念を提唱。同じ琵琶湖を事例に、幅広い利害関係者が一体となつての気候変動適応策が重要であるとの見方を示しました。

5. 健全な水循環島へ 産官学民の挑戦を発信 日本パビリオンで九州デー



日本パビリオンでは「九州デー」が開催され、国土交通省九州地方整備局をはじめ、福岡・北九州・熊本各市と大分県、九州で活躍する企業やNPO、そして九州大学がそれぞれの取組みを紹介しました。国連ハビタットのベルナード・バートウ専門官、日本水フォーラムの竹村公太郎事務局長も九州にまつわるショートプレゼンを行いました。

九州には、災害や公害、水不足といった“水の課題”を乗り越えてきた歴史があります。健全な水循環と持続的な発展の実現に向け、培ってきた叡智と技術、地域連携のあり方を世界に発信していました。

6. 途上国の汚水処理導入を議論



発展途上国における集合的な汚水処理の導入と管理を焦点に議論を行うテーマセッション「都市衛生と水域の保全—先進的取組みの必要性」(主催:プレーメン海外研究開発機構など)には約 80 人が参加し、段階的な処理機能の向上や技術者育成など、地域ニーズを考慮した導入手法について多くの意見が交わされました。また、パネリストの一人に国土交通省下水道部下水道企画課の若公崇敏氏も参加し、日本の下水道政策の変遷について説明しました。

7. 水資源管理の鍵は情報共有 NARBO セッションに関心集まる



NARBO(アジア河川流域機関ネットワーク)によるテーマセッション「IWRM のためのナレッジベース」が開かれました。水資源機構やアジア開発銀行などが設立した NARBO は、アジア・モンスーン地域における IWRM 推進を図るネットワークです。

議論を通じて、これから IWRM(統合水資源管理)を進めていくためのキーポイントは「水資源に関わるステークホルダーによる知識・データの共有」にあると確認されました。パネリストが紹介した情報共有の事例にはフロアから多くの質問が上がるなど、この場から先進的な取組みが広がっていく、そんな期待が高まるセッションでした。

今日の人

滋賀県副知事
西嶋 栄治氏

滋賀県の一般職員時代に下水道課に 4 年間在職、現在の湖南中部浄化センターで当時世界を先導する水処理技術として注目された「三次処理」のコスト計算の業務などに尽力し、琵琶湖環境部長も務めています。

「私の仕事の基礎を作ってくれた職場の一つは下水道」と現場に務めた時代を振り返ってくれました。第 3 回世界水フォーラムの開催地でもある滋賀県ですが、同県が提唱して始まった世界湖沼会議は今や 16 回の歴史を重ねています。世界に誇る琵琶湖の取組みに、会合では質問が集中。

経験に裏付けられた知見をもとに自らが英語で即答されている姿が印象的でした

